

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

玉 村 文 郎

目 次

はじめに

- 一、問題のありか
 - 二、ナクナクの用例をめぐって
 - 三、ナキナキの出現
 - 四、語形などの問題
 - 五、ナクナクの機能と意味
 - 六、ナクナクの表記形式
- おわりに

は じ め に

人が泣くといふことは、近年著しく少なくなって居るのである。(中略) 大人の泣かなくなつたのは勿論、子供も泣く回数
が段々と少なくなつて行くやうである。以前は泣蟲と謂つて、

ちよつとした事でもすぐ泣く兒が、事實幾らもあつたのであるが、今ではその泣蟲といふ言葉だけはまだ残つて居て、主として泣かせないまじなひのやうに之を使用して居る。又長泣きと謂つて、泣き出したら中々止めない子供もあつた。是などは言葉そのものが既に無くなつて居る。

右は、民俗学者柳田国男が「涕泣史談」と題して行なつた講演の抜き書きである。ここで、柳田国男は、人間の「ナク」行為に眼を向け、その時代的な変遷と、その変遷に見られる「ナク」行為の意味の差などについて考察している。

小考は、動詞「ナク」の重複形を手がかりにして、国語表現の不
易と可易の問題を考えようとするものである。

一、問題のありか

言語学では公理として、「全等な二語は存しない」と言われていて、類似表現が二個以上存在する場合には、必ずその二個以上の表現のあいだに、意義の広狭、新旧、雅俗の差などの価値・内容上のちがいがあつたものとされている。

たとえば、現代の作家木下順二に、次のような二つの類似表現があつて、

①じっさはおつたまげで、泣き泣きそれをひろって、庭のすみに
うめて……(ガニガニゴソゴソ「わらしべ長者」所収)

②そこで泣く泣く声をあげて、(中略) 名前だけでも聞かせてや
ろうと(絵姿女房「夕鶴・彦市ばなし」所収)

①はこの民話の地の文の中で、また②は朗読の中の語り手のことばとして用いられていて、それぞれ、後続の動詞「ひろう」「声をあげる」を修飾する情態副詞句として用いられている点に共通点がある。しかし、①が動詞「泣く」の連用形の畳語であり、②がその終止形の畳語である点に、明らかに形態上の差異があるにもかかわらず、表現に随分意を用いるこの作家が、ほぼ同情況の描写に、ことなる二形態(すなわち別語句)を使用していることは注目にあたいするであらう。

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

ここで、やや本筋からそれるが、あえてふれるなら、作者がこの語句の使い分けを意識していたかどうかを問わなくても、多分①が児童対象に書かれたものであり、②が「民話劇」中の一篇として、一般人を対象としていると思われる点に起因していると考えられるべきであらう。

さて、われわれが国語史に眼を向けるとき、そこに、体系的な変移の波にもかかわらず、しばしば不変のまま残った個別例の存在を認めることがある。この覚え書きの扱つところに限って、例をあげてみよう。

わが日本語において、動詞を後続する他の動詞の修飾語格に働かせる場合、先行動詞の終止形または連用形を畳むという方法をとることがある。(連用形畳語の方は現代においても、一音節連用形^①を除けば、なお生産的である。)その場合、表1によって明らかになように、終止形畳語が連用形畳語より时期的に早いと言える。もっとも、橋本四郎氏にすでに指摘のあるように、両形式のあいだに機能上の差異のあつたことは認められていい。

具体例を整理した結果から、概括的に導き出せる点として、

①上古になかった連用形畳語が中古以降に終止形畳語の座をおかすようになったこと

表1 連用修飾句を構成する終止形疊語と連用形疊語の用例⑥

語形式 作品名	終止形疊語			連用形疊語			かへす がへす	計
	四段活用	非四段 活用	↓ 小計	四段活用	非四段 活用	↓ 小計		
万葉集	25 (0)	7	32					32
竹取物語	4 (3)		4				1	5
伊勢物語	5 (4)		5				1	6
土左日記	2 (0)		2					2
落窪物語	2 (2)	1	3				1	4
源氏物語	66(45)	13	79	5	12	17	43	139
平家物語	88(78)		88	23	33	56	4	148
宇治拾遺物語	28(21)		28	8	3	11	11	50
御伽草子	7 (6)		7	5	6	11	12	30
徒然草	1 (0)		1		1	1	2	4
誹風柳多留				75 (5)	37	112		112
計	228 (159)	21	249	116 (5)	92	208	75	532

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

() 内の数字は「ナク」、「ナキ」の疊語形の使用度数

㊦連用形疊語は、活用形式から言えば非四段活用に、組成上から言えば複合動詞に早く例が見られること

㊧四段動詞の中では、三音節以上の動詞に、連用形の疊語化の例が早く表われること

㊨中世以降の例のうち、特定の動詞については、四段動詞・非四段動詞を問わず、終止形疊語のまま残ったことなどをあげることができる。

この最後の㊨に属する動詞が、最初にあげた「不変のまま残った」個別例に該当する。すなわち、マスマス ナクナク ハフハフ カヘスガヘス オツオツ オソルオソル ミスミスミルミル などである。

これらはいずれも、古い用例の当初から、あるいはその途中から、あたかも単独副詞のごとく用いられてきたもののように、

空しき御骸を見るく (源・桐壺)

のように、動詞機能を保持して先行の連用句を受けることなくなり、もっぱら情態副詞として、後続の動詞にのみ係るようになっていく。このことについては、ナクナク カヘスガヘス カハルガハルなどが、類聚名義抄において、「漢字一字の訓として附けられてゐることは、これらが一語と把握

されてゐたことの反映である。」(前掲橋本論文)との指摘も、一つの傍証としてあわせ考えるべきであらう。

さて、終止形置語でもっとも例の多いのは、ナクナクである。文献の性質により、用例の出現にかなり大きいかたよりのあるのは当然であるが、通覧した場合、ナクナクが断然第一位に立つことはまことに顕著な事実である。以下に用例を紹介しながら、ナクナクの特質と位相について考えていこう。

二、ナクナクの用例をめぐって

表2からうかがえるように、ナクナクは中古に始まって中世を通じて、一貫して、かなり広範な文献に安定したかたちで登場する。用例はなお近世の諸文献を経て現代のものに及んでいる。もっとも文献の質や語彙量に応じて、ナクナクの表われ方が必ずしも一様ではないことは、先にふれたとおりである。

ここで特記すべきこととして、平家物語における七八回という使用度数がある。この度数は、先行文献である源氏物語や今昔物語にすでに見えていたナクナクの頻用傾向を決定的なものにしたと考えられる。

表3^①に見られるとおり、ナクナクの使用度数は、平家物語の異なる

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

表2 ナクナクの用例(中古～中世)^②

文 献 名	用例数	文 献 名	用例数
竹 取 物 語	3	堤中納言物語	6
古 今 集	1	更 級 日 記	6
伊 勢 物 語	4	今 昔 物 語	109
後 撰 集	1	大 鏡	4
大 和 物 語	7	新 古 今 集	4
蜻 蛉 日 記	3	宇 治 拾 遺 物 語	21
落 窪 物 語	9	平 家 物 語	78
和 泉 式 部 日 記	1	古 本 説 話 集	8
紫 式 部 日 記	1	御 伽 草 子	6
源 氏 物 語	45	閑 吟 集	1
浜松中納言物語	21		

り語全体の中で第三〇〇位、副詞の中では第一六位であって、たしかに注目にあたいする数値である。しかも、第一位から第三〇位あたりまでの副詞が、ナクナクを除けば、いずれも、文献の性質や時代のちがいをこえて、普遍的に頻用されるものであることは、明瞭である。

平家物語におけるこのナクナク頻用の事実が、ただちに後世にお

表3 平家物語の副詞（使用度数順）

順位	副詞	全体での順位	度数	順位	副詞	全体での順位	度数
1	又	96	249	16	なくなく	300	78
2	只・唯	117	207	17	ともに	374	61
3	やがて	140	178	18	しばし	377	60
4	さ	141	173	19	すこし	389	57
5	すでに	143	171	20	なにと	393	59
6	いまだ	157	155	いかで たとひ と あまた など ：			
7	さて	174	142				
8	もって	182	136				
9	なほ	226	103				
10	つひに	229	102				
11	かう	247	94				
12	いかが	261	91				
13	まづ	279	85				
14	かく	294	80				
15	あまりに	297	79				

けるナクナクの使用に大きな影響を与えた唯一の契機と目されるわけではないが、しかし、いかんともしがたい場面に遭遇した人間の切迫した心理を描く際の恰好の表現として、以前から用いられていたナクナクが、ようやく頻用の果てに、定型表現化のみちをたどる

障子にナクナク一首の歌をぞかきつけける。(平家巻一祇王) のようになる。そして、本来の二動作の同時性を表示する機能を失って、構文的には、二個の動詞成分のあいだの挿入句として意識される結果となり、ここから、ナクナクの副詞化が促進されたと考え

にいたったと見ることができよう。その原因が恋であれ、戦乱であれ、封建制度であれ、さかいらい切れない運命の悲歎をかこちつつも、ついにあきらめなければならなかった登場人物の心情を描くにあたって、ナクナクは、いつか具体的な「泣く」動作を伴わなくても、情態副詞として機能するようになり、愛用されていくことになった。表2を一見すれば、源氏以下の物語類にきわだってナクナクの用例の多いことが知られる。描写という見地に立って見れば、ナクナクが物語類に多いのは、むしろ自然の理であると^⑧言える。

また、ミルミル オモフオモフ キクキクなどの量語に、知覚内容を示す連用修飾語句が必然的に先行するのとはことなり、「泣く」が完全自動詞であるために、ナクナクは直接には修飾語句を受ける必要がないから、みずからが通例もっぱら後統動詞に係る連用修飾句として働くだけであり、

られるのである。

ところで、ナクナクの用例に時代的な下限があるであろうか。先にあげた木下順二の作品におけるように、現代においても、ナクナクはかなり広く使用されている。いま、便宜現在通行の辞典類にあたってみると次のようになる。(○印は見出し語として掲出、×印は不掲出)

辞典名	(編著者名)	なきなき	なくなく
学習国語新辞典	(金田一京助)	×	×
音訓両引き国語辞典	(山田忠雄)	×	×
学習国語辞典	(小林国雄)	×	○
用例学習国語辞典	(金田一春彦)	×	○
文英堂学習国語辞典	(時枝誠記)	×	○
漢字で引く国語辞典	(原富男)	×	○
学習国語大辞典	(佐伯梅友)	○	○
大日本図書国語辞典	(岩淵悦太郎)	○	○
講談社国語辞典	(ジュニア版) (川端康成) (佐伯梅友)	○	○
例解国語辞典	(時枝誠記)	○	○
明解国語辞典	(金田一京助)	×	○
講談社国語辞典	(久松潜一他)	×	○
角川国語辞典	(武田祐吉) (久松潜一)	×	○

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

三省堂国語辞典	(金田一京助)	×	○
旺文社国語辞典		×	○
旺文社国語総合辞典	(久松潜一他)	×	○
新明解国語辞典	(金田一京助他)	○	○
岩波国語辞典	(西尾実) (岩淵悦太郎)	×	○
新潮国語辞典	(久松潜一)	○	○
ローマ字で引く国語新辞典	(福原麟太郎) (山岸徳平)	○	○
三省堂新国語中辞典		○	○
広辞苑	(新村出)	○	○
日本語アクセント辞典	(NHK)	○	○
明解日本語アクセント辞典	(金田一春彦)	○	○
言海	(大槻文彦)	×	○
辞林	(金沢庄三郎)	○	○
辞鑿	(垣内松三)	×	×

両形とも掲出ししないもの
ナクナクのみを掲出するもの
両形とも掲出するもの

計 27点

こうしてみると、ナクナク ナキナキをともに掲出していい辞典を除くと、両形を掲出している辞典と、していない辞典は、同数である。この事実は、①ナクナクが現在でもなお使われながら、語法上では、めずらしい形として、古語化のみちをたどりつつあること、②その一方では、ナキナキがことさら掲出されて、この形もまた、ハシリハシリ イイイイなどより、いまなお頻繁に用いられているらしいこと、を暗示している。ともかく、古形ナクナクは、直接的には伝統的な使用例に支えられつつ、また内面的には新形ナキナキの頻用から刺激を受けながら、まだ当分はその姿を消すことはないと考えられる。

中世から近世にかけて、他の動詞から分出された畳語形式が、少数の例外（カヘスガヘス ハフハフ ミスミスなど）を除いて、連用形のそれに転じたのちも、このナクナクが根づよく生き残ったのには、ナクナクが前記例外の類と同じく、単独副詞的に意識されたためという理由を一往は考えることができる。たしかに、口語的性格が強いと考えられる文献の中でも、

子は泣く泣く伯父のひざに居けり（醒睡笑^⑧ 卷之四聞えた批判
九）

斯て、百姓どもは、なくなく十文がはらに急ぎける（狐塚千本
繪「民衆運動の思想」所収）

場中で恥をかかせたれば、泣く泣く鳥の中に加はり、尾羽をすぼめて、かがみ廻った。（キリシタン版エソポ物語「孔雀と鳥の事」）

のように、ナクナクが用いられている。

しかし、例外の類が、今日にいたるまで、連用形の畳語形式を分せず、副詞化が早期に完了していたと考えられるのと比べると、ナクナクはかなり事情をことにしている。この場合、語意識というよりは、やはり頻用による固定化・類型化の力が大きかったと見るべきであろう。

三、ナキナキの出現

前章ではもっぱらナクナクについて論じた。しかし、ナクナクは現在でも用いられるが、冒頭にあげた木下順二の作品の例や前章の辞典類の見出し語の調査の結果からも、ナキナキと共存の状態にあることは明らかであり、ナキナキの用例と合わせ考えられるべきものである。

ナキナキの古い用例をあげると、

- 1、*Nagui nagui vmareta*, 1, *Nagui nagu vmareta*. ロドリゲス
日本大文典（一六〇八）
- 2、郭公なきく飛ぞ聞はし 芭蕉 續虚栗（一六八七）

3、玄宗ハなきく耳のあかをほり 誹風柳多留二篇 (一七六六?)

4、ナキくなくく 富士谷御杖 詞葉新雅 (一七九二)

5、ナキナキモセメテハ御前ノ近江へ御通ヒナサルノヲナリ見様ケレ。本居宣長 古今和歌集遠鏡 古今恋四(七)(一七九四)

6、なくく 哭々也。なきなきといへり。橘守部 雅言考 などである。

(なお附言するならば、ここに、平凡社刊「大辞典」および「新潮国語辞典」が掲出している狂言の用例がある。すなわち、「當今世迷言計をいうて、涙をこぼし泣き泣き致されます。」(「狂言・茶盃拜」)のナキナキの用例である。しかし、この構文にあつては、ナキナキスル、ナキツツケル、ヨクナクの意であつて、小考に扱ふところの連用修飾句とは考えられない。)

つぶさに諸資料に眼を通したわけではないため、この段階でナキナキの用例の上限を云々することはさしひかえねばならないが、文献としては一七世紀初頭のロドリゲスの日本大文典にまでは遡り得ることは、右に見たとおり明らかである。したがつて、先行文章語の影響を受けることの少ない口頭語の世界においては、もっと早くからナキナキが用いられていたことは想像にかたくない。

終止形疊語から連用形疊語への交替という一般的現象の中で、

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

語によって遅速があり、また文献によって遅速があつたことは当然である。しかし、ナクの場合ほど、新形の連用形疊語の登場がおそく、かつ、長期にわたつて終止形疊語と両立共存した例は、他に見ることができない。しかも、ナキナキは、われわれの接し得る江戸時代の諸文献においても、終始ナクナクに主位を占められたまま、口語の世界に息づいていただけであつたようである。これらの点に、ナクナクの並み並みならぬ根づきと、この語句の特殊な位置を見ないわけにはいかない。

四、語形などの問題

ナクナクの特殊性を考える場合、語形を問題にしなければならぬ。先に副詞化の早かつた動詞疊語として、カヘスガヘス ハフハフ ミスミスなどをあげた。その用例は、

(1)カヘスガヘス ①しはしば。なんども。「加邇須加邇須念へども」続日本紀宣命 第一六詔 ②かさねがさね。重々。「かへす」本意なく覚え侍れ」竹取

(2)ハフハフ ①はうようにしてやつと歩いて行くさま。かろうじて。「翁さびはふはふのぼる位山……」頼政集 ②あわてふためくさま。とるものもとりあえず。「いたはる事ありてえ参らぬを、殿よりせめて仰せらるれば、はふはふ参りて」頭輔集

ハフハフのてい 日ボ辞書

(3) ミスミス 見せながら。見ているうちに。梅の花目に見す見す

も衰ふるかな (宇津保・梅の花笠) 目に見す見す、世にはか

かることこそはありけれ…… (源氏・葵)

のようである。

これらは、(1)が連濁を起して、一語としてのまとまりを早く示していること、(2)がハフハフのテイの形で固定して名詞的に処遇され、一方で音韻変化をこうむって、ホウホウの形となっていること、(3)が当初の「目ニミスミス」の形から「目ニ」が省かれて、独立して用いられるようになったことよって、いずれも、語形上ないしは語格上の変化をきたし、もとの動詞とのあいだにへだたりができてゐる。これらに比すると、ナクナクは終始、語形・語格上の変化を受けることなく、つねに「ナク」の疊語形式であることを明示する姿をつらぬいてきた。ここに、ナクナクが、頻用による固定化の中にも、ナキナキを胚胎する契機があったと考えられる。

なお、カヘスガヘスと同様に、古くから副詞化が完了していたと見られるものとして、マスマス、シクシクがあげられる。これらも「疊語化による副詞への転成」の例であるが、なぜこれらの語に副詞化が早く起こったのかについては、別に考えたい。

また、この類に近いものに、オソロオソロ オゾオゾ ミルミル

などがある。これらは、オソレオソレ オゾオゾ ミイミイなどの、連用形(あるいはその長音化)の疊語形を後世もつことになる点で、カヘスガヘスの類とも、ちがうことに注意しなければならぬ。

五、ナクナクの機能と意味

ナクナクなどの機能について、早く注意したものに、ロドリゲスの日本大文典がある。

○動詞の語根を繰返したものを往々分詞として使ふが、それは我々が *Veo rindo, comendo, ou chorando.* (笑ひながら、食ひながら、又は、泣きながら来た。)といふ場合に似てゐる。例へば、*Varai varai maitta, Cui cui quita. Naqui naqui ymareta, I, Naqu naqu ymareta. Cichu maitta. Naqu naqu cayeru* 等。

右の説明はポルトガル語の現在分詞をあてただけで、同時性表示の機能を教えるにとどまるが、ナキナキ型とナクナク型の両形を併記し、しかも、ナキナキ型を先にあげている点は注目にあたいしよう。右の説明における「語根」は連用形のことであるが、本書がナキナキ型を先にあげたのは、「この書では主として話しことば及び普通の會話に参考となる事を取扱ったのであるが、……」(本文典

の論述を理解し易からしめんが爲の例言數則)との方針にしたがったためにほかならない。

次に、時代ははるかにくだるが、俗語による歌語検索辞典としてまとめられた詞葉新雅(寛政四年)が、

ナキく　　なくく　　(四十三丁ウ)

シヨウコトナシニ　なくく　　(九十丁オ)

と、二個所にナクナクをあげているのは興味深いところである。なぜなら、ナキナキには当然としても、シヨウコトナシニにもナクナクをあてていて、ナクナクが、明らかに現実には、「泣く」という一見してわかる動作を随伴していなくても、つよい悲歎・困惑・不満を感じている主体の情意を描写する語句として、考えられることの多かつた事実を示しているからである。この詞葉新雅にうかがえる語義の的確な把握と比べると、

○なくなく　　哭々也。俗にはなきくといへり。哭乍と云ふに

同じ。凡て俗言には乍を、謂乍をいひく、聞乍をきく

くなど云ふを、雅言にはいふく、きくくと云へり。

此格みな同じ。(雅言考)

とした橘守部の説明は、体系的ではあるが、表面的な言及に終わっていると言わなければならない。

ちなみに、辞書におけるナクナクの語義説明としては、ほとんど

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

ど、ナキナキ　ナキナガラ　ナキツツとするのみであるが、次のものは注目されている。

(1)大日本国語辞典

なくなく　泣泣　鳴鳴(副)　なきながら。

なきつつ。なきなき。

なくなくと　泣泣　泣きぬべきほどのさまにて。泣かぬばかりにて。

りにて。

(2)セスラン和仏大辞典(一九四〇)

naku naku (泣々) ad. 1. En pleurant, tout en larmes. 2.

Avec repugnance, à contre-cœur, à regret. ⑧

(3)ローマ字で引く国語新辞典

naki-naki 泣き泣き(副) 1 なきながら。[between sobs] 2

(俗に) やつとのことば。かすかす。[barely](例) 泣き泣き

一合しかない。

さて、既述のとおり、ナクから分出されたナクナクの本来の機能は、後続の動詞の連用修飾格に立って、二個の動作の同時性を示すことであつた。しかし、先にもふれたように、前件たるナクナクは、後件たる動詞によって統括される従属的動作であることから脱け出るわけにはいかないという日本語の構文的性格から、やがて、

現実の可視的な動作性を消失して、情態あるいは情意を描写する副詞と化していく運命をもっていた。その際、ナクが完全自動詞であることが、この語句の副詞化を助けたと考えられることも、先に述べたとおりである。ワナクワナク フルフルフ ハシルハシル ワラフワラフなどに終止形置語が多いように見えるのには、これらの動詞の性質を見なければならぬであろう。

なお、ナクという和語は、*no nanu* などと同根と目され、本来、「声をあげてナク」意であって、語源的にもナクナクという疊語がきわめて喚起的感性的なものであったと考えられることも、この際指摘しておきたい。

六、ナクナクの表記形式

ナクナクの表記形式は随分多様である。漢字を主にした辞書では、「泣」且「且」の各一字にナクナクが訓として与えられていて、

泣 ナク ナク ナク (類聚名義抄法上一四)

且 ナク ナク 泣向 (色葉字類抄黒川本中三六丁ウハ)

のように記載されている。

漢文訓読体でも、「泣」字一字をナクナクと訓ずる場合が多い。

泣尋沙塞出家郷 (泣くなく沙塞を尋ねて 家郷を出づ) 和漢朗

詠集700

今昔物語では、「泣くく」「泣々」「泣々く」「泣々く」の順で使用されている。平家物語では「なくなく」が「泣々」よりやや多いようである。「泣々」は江戸時代にもかなり見られるが、「泣くく」が漸次標準化されていった。

「泣々」「哭々」といった表記形式であっても、「なくなく」とよんで、まずまちがいはなかったようである。それは、ナクナクの安定した使用例に支えられていたからである。

払難泣く母はきばるなり (柳多留八32)

は、他の表記例(多くは「なきく」)から推して、「なきなき」とした岩波文庫本の索引になんら異論をさしはさむ必要はあるまい。

おわりに

以上、連用修飾句ナクナクをめぐる数点の考察を展開してきた。ナクナクが、いわば文学語として定着し、類型化をきたしつつも長いあいだ頻用され、語形を変えなかった理由はほぼ明らかになつたと考える。終止形置語と連用形置語に関する一般の原理的な問題は、すでに前掲橋本論文が指摘しているところであり、いま特につけくわえるべきものはない。ただ、類似の言語表現の機能や意義を考察する立場からは、当然、ナク ナキツツ ナキナガラ ナミダヲナガスなどの発生、消長、使用度数をも合わせ考えるべきであ

るが、今回はもっぱらナクナクに焦点をしばった考察に終わったこととをことわらねばならない。また、ナクナク以外の動詞疊語の具体的な様相についてもふれることができなかった。それらについては、統考にゆずりたい。

注

① 現代語における一音節連用形は、一段活用か変格活用にしかない。関西方言におけるシイシイ、ミイミイのような長音化を除外すれば、結局、一音節連用形疊語は存在しないとさえ言う。

② 橋本四郎「動詞の重複形」〔国語国文〕第二十八卷第八号)

③ 表1作成にあたっては、各種の索引類によった。ただし、宇治拾遺物語と誹風柳多留については岩波文庫本によった。

なお、参考までに、次ページに「古典対照語い表」から抄出した動詞疊語の用例表をあげる。

④ 三音節以上の場合、複合語であることが多いために、一般的傾向としては、たしかに音節数の多いものほど連用形疊語に転じやすかったと言える。ただし、ハシルハシル フルフルフ ワナナクワナナクのような例外もあった。(上田秋成の使用例、フルフフルフ ワナナクワナナク 叫ブ叫ブ アユムア ユム ノボルノボルなど(藤篋冊子) 参照)

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

⑤ 「雑兵物語」のような武士に関する記録、「枕草子」のような日記で理知的執筆態度によってなったものなどには、ナクナクは見あたらない。

⑥ 表2も各種の索引類によって作った。索引のないものについては、岩波文庫本によって算出した。今昔物語は、現存の28巻のうち、「文節索引」の出ている13巻分について調べた。

⑦ 表3は、金田一春彦他編「平家物語総索引」巻末の「使用度数表」により作成した。

⑧ 今昔物語その他の用例を見ても、地の文における例がほとんどを占めており、会話の部分では少数を数えるにとどまる。このこともナクナクと描写性との関連を物語っている。

⑨ 醒睡笑は、本覚え書きの扱う角度から見ると、意外に文語的であると言える。ナクナク(3)、キクキク(1)、フルフフルフ(2)、タドルタドル(1)などのナクナク型が多い。しかし、勿論、イヒイヒ、オソレオソレのようなナキナキ型も含んでいる。また、「中老ほどの人餅を見る見る。『……』よしいふを聞き、『……』とおもひ、(卷之三不文字一七)のような例もある。

⑩ この発句は、あつめ句では「ほととぎすなくく」とぶぞいそがはし」となっている。(日本古典文学大系「芭蕉句集」発句

篇304)

動詞疊語の用例表(「古典対照語い表」による)

作品名 疊語例	徒 然 草	方 丈 記	大 鏡	更 級	紫 式 部 日 記	源 氏	枕 草 子	蜻 蛉	後 撰 集	土 左	古 今 集	伊 勢	竹 取	万 葉 集	計
ありあり				2		5	1								8
いふいふ					1	1				1		1			4
おづおづ								1							1
おもふおもふ						5	5								10
かはるがはる					1										1
かへすがへす	2		5	1		43	7	2			2	1	1		64
きくきく						2		1							3
しるしる						3		2	3						8
たどるたどる									4						4
とるとる						1									1
なくなく			4	6	1	45		3	1		1	4	3		68
なげくなげく						2									2
なへぐなへぐ								1							1
にくむにくむ						1									1
ぬるぬる														2	2
はしるはしる				1											1
はふはふ	1														1
ふるふるふ					1	1									2
ますます			1											5	6
まどふまどふ									1						1
みすみす					1	3									4
みるみる			1			10		2							13
めぐるめぐる						1		1							2
やすやす														1	1
ゆくゆく			1												1
わななくわななく			3			13	2	1							19
わくわく														1	1
わらふわらふ								1							1
をりをり														1	1
しくしく														21	21
すす														2	2
かへるがへる						1				1					2

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

⑪ なお、室町・桃山・江戸初期の口語的資料を通覧する必要があるが、今回は果たさなかつた。とりわけ抄物・法語等に眼をひらげなければならぬが、部分的な調査に終わった。「抄物資料集成」(史記抄・毛詩抄・蒙求抄)や「長恨歌抄」などにも見あたらないようである。

⑫ 一音節連用形(長音化) 疊語の例。

さしをなげあくびしいく 寐まんしゃう(柳多留三・36)
いんぐわ立^テしいく 内義はらむ也(同四・17)

娶の白見いくまきを一本引(同三・3)

ひやめしを見いく 内義米を出し(同三・8)

女房持山を見いく 鹿を追ひ(同三・12)

ミイく みるく ミながら(詞葉新雅八十八丁ウ)

残念ナガラ己ハヨウニ見いく 來タニ

(古今和歌集遠鏡 山高み見つつわがこし)

⑬ ロドリゲス日本大文典(土井忠生訳)による。(同書106ページ)

ジ)

⑭ ただし、同辞典が引いている「泣くなく」といふばかりに申させ給へば(栄華物語・岩蔭)の例は、動詞イフの内容と引用の助詞トとの連接と考えられるから、適例でない。この栄華物語の例をもって、「泣きぬべきほどのさまにて。云々」の語義

連用修飾句ナクナクについての覚え書き

説明が導き出されたのであれば、(1)の後段は問題外となる。「泣くなくといふばかりに」全体が、「泣きぬべきほどのさまにて」に相当すると見られる。

なお、動詞疊語に「ト」が添加された場合、タドルタドルト、ユクユクトのように、一般的に情態副詞化が進むことは確かである。

⑮ 1は、「泣きながら・涙ながらに」の意。

2は、いずれも、「いやいや・いやいやながら・不本意ながら」の意。

⑯ 漢詩の訓読文においては、

翠黛紅顔錦繡裝 泣尋沙塞出家郷 江

泣くなく沙塞を尋ねて家郷を出づ(和漢朗詠集 700)

欲充今日新飢饉 泣賣先朝舊賜箏 紀

泣くなく先朝の舊く賜へる箏のことを賣る(同 717)

驛樓執手泣相分 驛樓に手を執りて

泣くなく相分れしに(菅家文章卷第三 237)

のように、「泣」字が句頭または句中にあって、直後に動詞がくる場合は、ナクナクと訓まれることが多く、名詞成分が後にくる場合は、「ヲナク」「ニナク」などと訓まれている。しかし、聞喪泣讀故人書 喪を聞きて泣きて讀む故人の書(菅家文章

巻第四 (216)

のような場合もあつて、ナクナクがとられていないこともあ
る。勿論、句末に「泣」字がある場合は、名詞か単独動詞か
あり、動詞疊語として訓読されることはない。

なお、参考までに、次のような事実を紹介しよう。

「国歌大観」によれば、ナクナクを句頭にもつ和歌が、61首あ
ることが知れるが、その所在句や句構造は次のとおりである。

なくなくモ	11	(第一句)
なくなくゾ	2	(第三句)
なくなく〇〇〇	34	}
なくなくモ〇〇	4	
なくなくゾ〇〇	10	}
計	61	

ナクナクモがすべて第一句において用いられていることは、
和歌の世界における伝統という文学的な側面を考え合わせて
も、なお言語構造からの必然性を想定したくなる事実であ
らう。

「三句索引俳句大観」によれば、ナクナクを句頭にもつもの
は、すべて中句に集中しており、ナクナク〇〇〇型となってい
る。(計4句)

和歌・俳句におけるナクナクの用例にかなり位置・構造の上
の特徴のあることが知れたが、今はこれ以上の考察は行なわ
ない。

⑰ ナクが完全自動詞であるとは言つても、ネヲナク(ねを泣く
むしのなれる姿を〔千載・恋五〕)のような同族目的な用法
や、

我泣分陰共鑿氷 我は分陰も共に氷に鑿めしことを泣く

(菅家文章巻第二 93)

且泣炎洲鼠獨生 泣かなむとす 炎洲 鼠獨り生ることを

(同巻第二 95)

のような他動詞的用法のあることを書きそえておく。

(一九七三・一〇・三二)